

## 令和元年度第1回京都市はぐくみ推進審議会「教育環境づくり部会」 摘録

日 時 令和元年7月8日（月） 13：30～14：40

場 所 京都市総合教育センター 第2研修室

出席者 初田幸隆部会長，大澤彰久委員，杉原颯太委員，中川佐和子委員，藤本明弘  
（5名）委員

欠席者 伊豆田千加委員，井筒隆夫委員  
（2名）

### 次 第

1 本市挨拶

2 議題

- (1) 「子ども・若者に係る総合的な計画（仮称）」の策定について
- (2) 「子ども・若者に係る総合的な計画（仮称）」策定に係る「子どもの教育環境」の今後の方向性について

司会 (事務局)	令和元年度 第1回京都市はぐくみ推進審議会「教育環境づくり部会」を開催する。
	本日の会議については、市民に公開のうえ開催し、傍聴者1名であることを報告する。
	それでは、はじめに、初田部会長から一言御挨拶をお願いしたい。
初田部会長	(あいさつ)
司会 (事務局)	続いて、部会長以外の委員の皆様から自己紹介をお願いしたい。
委員	(あいさつ)
司会 (事務局)	なお、伊豆田千加委員、井筒隆夫委員におかれては、本日御欠席である。「京都市はぐくみ推進審議会条例施行規則」第4条第3項において、当部会は委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができないとされているところ、本日は委員7名中、5名の出席であるため、会議が成立していることを報告する。
	それでは、これからの議事進行については、初田部会長をお願いしたい。
初田部会長	それでは、議事に入る。
	まず次第の議題 1「子ども・若者に係る総合的な計画(仮称)の策定について」は、新計画全体のコンセプト等に関するものであり、本部会で直接的に審議するものではないが、本日の議題の前提として事務局から説明をお願いしたい。
事務局	資料3「子ども・若者に係る総合的な計画(仮称)の策定について」を用いて説明
初田部会長	続いて、次第の議題 2「子ども・若者に係る総合的な計画(仮称)の策定に係る『子どもの教育環境』の今後の方向性について」について、審議する。まず事務局から説明をお願いしたい。
事務局	資料4「計画体系」、 資料5「子どもの教育環境について」を用いて説明
初田部会長	議題2について意見があればお願いしたい。
藤本委員	本部会の審議事項ではないかもしれないが、新計画全体について申し上げる。新計画の名称については現在仮称とのことだが、市民の心

	<p>をつかむものとなるよう、しっかり検討いただきたい。次に、資料3の新計画のコンセプトについてだが、総花的で、何に力点を置いているのか分からない。特に別紙のポンチ図の中央の「ライフステージに応じた子ども・若者の成長」と「子ども・若者とその家庭をみんなで支え・育む社会」との相関関係が分かりにくい。まず、子どもたちの学びと育ちが軸にあって、それを取り巻くように支援の輪が形成されていることが分かるように示してほしい。</p> <p>また、ワークライフバランスという言葉が定着してきたが、ワークとライフという概念が相反するものだと捉えられる風潮を危惧している。豊かなライフの中にワークがある。大人が生き生きとした姿を見せ、子どものお手本になることが重要。</p> <p>それから資料5の(1)の中で主な取組に挙げられている「保幼小連携の推進」だが、表現として少々物足りない。単なる連携にとどまらず、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムに代表される「教育内容の接続」を踏まえた表現が望ましい。</p>
初田部会長	<p>資料3の新計画のコンセプトだが、確かに表現の工夫が必要ではないか。付け加えると「子ども・若者とその家庭をみんなで支え・育む社会」の支援主体が多く記載されているが、これら多くの主体がどのような連携をするかということが重要。</p> <p>また、「保幼小連携の推進」については同意見。非認知能力を幼少期からどのように育むのかは、教育課題として重要だと考える。子どもたちの学びの意欲を喚起し、「主体的に学びに向かう力」を育成するうえで、教育内容の接続は必要不可欠である。</p>
事務局	<p>保幼小の連携・接続については幼保推進部会でも審議されているところであり、部会間での連携を図りながら内容等の検討を図りたい。</p>
大澤委員	<p>ワークとライフは相反するものではなく、いかにハーモニー（調和）させていくかが問われる。</p>
中川委員	<p>京都ならではの伝統文化教育やジュニア京都検定は良い取組。親子で一緒に取り組むと、より効果が高まるものと考ええる。</p>
大澤委員	<p>子育てには、まず親自身が子どもと向き合うことが大切であり、あらゆる機会を捉えて、全ての親が学びを深める環境づくりが必要ではないか。</p>
中川委員	<p>例えば乳幼児期の検診等で、親学びの場があれば参加しやすい。</p>

事務局	<p>親学びの場として、教育委員会事務局と子ども若者はぐくみ局の連携で親同士の交流を図る親支援プログラム「ほっこり子育てひろば」を実施している。また、8か月児健康診査の実施時に赤ちゃんと親を対象にした、ボランティアによる絵本の読み聞かせや絵本の紹介を行うなどの「ブックスタート」という事業も着手している。ただ、いずれの取組もどれだけ多くの親に参加してもらえるのかが課題。さらに、フリースクールとの連携による、不登校の子どもたちの興味や関心に応じた活動や必要に応じた親との相談を行う「ふれあい・アテンダント」事業も実施している。</p>
大澤委員	<p>親学びでは、参加してほしい人に取組が届くことが大切である。</p>
初田部会長	<p>親学びについては、子どもの全てのライフステージに関わることであり、全体会でも議論すべきこと。</p>
杉原委員	<p>大人が心から楽しむ姿を子どもたちに見せることで、子どもたちは未来への明るい見通しを持つことができる。ところで、資料5(1)の主な取組にある「未来型教育モデル」とはどのようなものか。</p>
事務局	<p>現在、「未来型教育モデル」として、NECや京都大学学術情報メディアセンターとともに先端技術を活用した協働学習において学習状況の可視化や統合的な学習データ分析を行う実証研究を進めている。グループ学習の中で、子どもたちの発話内容を文字化し、即時に教師がその内容を把握することができるなど、多様化する子どもたち一人一人に合った学習を教師だけの力ではなく、先端技術により実現していくもの。先端技術も授業に関心を持つための手立ての1つと考えている。</p>
初田部会長	<p>資料5の(2)の中で、主な取組に挙げられている「地域との共汗で取り組む学校統合」とあるが、これまでの伝統や精神を継承しつつより良い子どもたちの学びのための新しい学校づくりが目的ではないか。</p>
事務局	<p>他の自治体であれば、学校規模の適正化を見据え、学校統合に取り組む場合が多いが、本市ではまず、地域での議論があり、そのうえで地域からの要望を受けて学校統合を進めてきている経過があることを報告する。</p>
初田部会長	<p>定刻を過ぎたため、閉会とする。限られた時間であったため、委員のみなさんで、意見の補足・追加がある場合には質問票に記載のうえ、事務局に提出すること。 (以上)</p>